

岡崎久彦著「隣の国で考えたこと」中公文庫、中央公論社 1973年7月10日刊を読む

良書の乏しさ - 無知の絶壁 -

- 1 .私の少年時代以来の読書の中で、韓国の歴史については爪をひっかける場所もありませんでした。
- 2 .朝鮮半島の三国時代といえば、白村江で負けた歴史しか覚えていません。白村江の歴史などは、史実ではあるようですが、唐側、韓国側の歴史ではごく簡単に触れられているだけです。当時の朝鮮半島全体の歴史からいえば、三国中最も小さかった新羅が、外交、軍事の両面で卓越した手腕により、唐との同盟で百済、高句麗を滅ぼし、ついで、半島に残ろうとする唐軍を駆逐する過程が歴史の主題であります。それに比べれば百済がいったん滅んだ後、百済再興の軍を日本が助けようとして一敗地にまみれた白村江の歴史などは全体の歴史の中の小さなエピソードに過ぎません。これを軽重の差で比較すると、ちょうど、シベリア出兵の歴史だけを知っていて、ロシア革命全体についてほとんど何も知らないと同じことです。
- 3 .古代の武士道の華、花郎を率いてよく戦い、外交面では唐を手玉に取って朝鮮半島統一の偉業をなし遂げた新羅の武烈王、その股肱の臣きんゆしん金庾信の事績などは、彼等の若き日のロマンスとも相まって、その規模の雄大さ、ロマンチックさで、世界のどの王朝創設の叙事詩にも負けない面白い内容を持っているのですが、日本語で読みやすく書かれたものを見たことがありません。
- 4 .これに限らず、新羅の末期、再び新羅、高麗、後百済と三国鼎立した中から、馬上に天下を取った高麗の始祖王建の事績も、太閤記や徳川家康の一代記に比すべき内容を持ったものですし、この話一つで、三国の昔から中世に至る朝鮮半島の歴史がわかります。また、李舜臣の伝記を読めば、李朝の士大夫の志操の高さと同時に、李朝中期以降の政治の弊害であった党争の内容を知ることができましょう。さらに、伊藤博文を殺した安重根の伝記を読めば、日韓併合当時の韓国の社会相、インテリの考え方が、我々が漠然として想像していたものとはるかに異なることがわかってきます。しかし、右に述べたうち、どの一つも現代の日本人の常識となっていないのが現実ですから、どこから韓国史を理解してよいのか、爪のかかるところもない絶壁の前に立っているような感じです。

P59 ~ 60

[コメント]

日本に最も近い国でありながら、韓国についての本があまりにも少ないことを指摘し、それならと自ら筆を起こされた岡崎氏。無知が誤解や感情の行き違いを生む、そんなことのないようにと外交官としての激務の中で書かれた本書。

- 2010年6月28日 林明夫記 -